【書評】

Elsa Högberg, *Virginia Woolf and the Ethics of Intimacy* (Bloomsbury Publishing, 2020)

松本夏織

審美的モダニズムか政治的フェミニズムか——英国作家ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf, 1882-1941）研究は、このような二項対立的構図に長らく支配されてきた。1970 年代、第二波フェミニズム運動の高まりと共にフェミニズム批評が一旦は優勢を見せるも、70 年代後半にはウルフの政治的見解を文体から分析する折衷的議論が見られるようになる。このとき、モダニズムとフェミニズムの対立を統合へと導いたのがポスト構造主義の視座であり、その批評の多くはジャック・ラカンの修正を行ったジュリア・クリステヴァに拠るものであった。ウルフの文体を「女性の言語」の模索と捉える初期の論考として、Gillian Beer と Mary Jacobus による *Women Writing and Writing About Women*（1979）が数えられ、その後も、英米フェミニズム批評からポスト構造主義への転回を企図する Toril Moi の *Sexual / Textual Politics*（1985）や、Makiko Minow-Pinkney の *Virginia Woolf and the Problem of the Subject*（1987）と、ウルフによる「女性の文体」（feminine writing）を象徴界（the symbolic）と原記号界（the semiotic）の裂け目と捉える研究が続いた（Minow-Pinkney 64-65）。

Elsa Högberg による *Virginia Woolf and the Ethics of Intimacy* は、このようなフェミニスト精神分析の潮流に位置付けられる。本書は先行研究が依拠していた 20 世紀ポスト構造主義理論を 21 世紀にまで拡大し、ウルフの戦間期作品における主体性（subjectivity）、倫理（ethics）、美学（aesthetics）、情動（affect）、政治（politics）が交差する地点を詳らかにする。

第 1 章は、クリステヴァの「黒い太陽」（the black sun）とジュディス・バトラーのメランコリー論から、実験性を高く評価される最初のモダニズム小説『ジェイコブの部屋』（1922）を論じる[1]。まず Högberg はヴァルター・ベンヤミンの「物語作者——ニコライ・レスコフの作品についての考察」（1936）を引用する。ベンヤミンは「ものがたり」（storytelling）を社会的な絆が構築される場と捉え、大戦を契機とした近代小説の台頭と共にものがたることが減少し、ひいては親密な共同体の崩壊を招いたと記す。Högberg によると、このような前時代との断絶をウルフはよりメランコリックに語ると言う。ウルフが悲観的に記したモダニズムの「現在」は紛れ

[1] 『ジェイコブの部屋』が出版された 1922 年は、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』と T・S・エリオットの『荒地』が出版され、まさにモダニズム文学の幕開けとも呼べる画期的な年であった。

もなくメランコリーと逆行性に満ちており、モダニティからは根源的かつ時間的に切り離されていると論じる。次に Högberg は、伝統的なリアリズム文学と軍事化・ナショナリズムの共犯関係を示し、反リアリズム的・断片的（fragmented）な語りを、戦争と結託する国家主義的・家父長制的語りの崩壊と分析する William R. Handley の論考を紹介する。『ジェイコブの部屋』におけるリアリズム文学の転覆に政治性を見出した上で、Högberg は戦間期に見られる文学的伝統の「喪失」、特に書き言葉によって結ばれる親密な絆の「喪失」を俎上に載せ、フロイトの「喪とメランコリー」（1917）に接続する。その際、『幕間』（1941）や未完の作品 “Anon”など、ウルフの晩年の作品との比較を通して、いかにして前近代の文化が周縁化されていったのかを明らかにしている。また、親密さと暴力とが絡み合う場として『ジェイコブの部屋』における手紙に着目する。Högberg は、手紙を個人の内面や感情の親密な交換であると同時に、書き手を知識や確実性へと結び付ける営みと位置付け、確立された文体の慣習を問題化する。そして、知ることを拒み、ただ相手と一体になることのみを望んだ『灯台へ』（1927）のリリー・ブリスコーを補助線に、近代に構築された親密さの拒絶が、文語的親密さの非暴力な形態につながると論じる。以上の分析を通して、『ジェイコブの部屋』のメランコリックな文体に非暴力の倫理と政治の交差性を読み解いてゆく。

第 2 章は、焦点化（focalisation）や自由間接話法（free indirect discourse）を用いた実験小説『ダロウェイ夫人』（1925）を取り上げ、クリステヴァの「内なる抵抗」（intimate revolt）とバトラーの「自分自身を説明すること」（giving an account of oneself）から論じる。「悲しみ」や「喪失」によって彩られる『ジェイコブの部屋』に対し、本作を象徴するのは喜び、つまり「享楽」（*jouissance*）である。Högberg は『ダロウェイ夫人』を「内なる抵抗」の美的実践と捉え、詩的な内省に特有の快楽を通じて構造的暴力に抵抗したと論じる。詩的散文の戯れは、『自分ひとりの部屋』（1929）において描かれる男性的で独断的な「I」の輪郭を揺るがし、自己の再構成を促すと言う。続けて Högberg は、イヴ・K・セジウィックの『タッチング・フィーリング』（2003）を参照し、『ダロウェイ夫人』におけるパラノイア的読解と修復的読解が重なる地点を分析する。シェル・ショック患者であるセプティマス・ウォレン・スミスを構造的暴力の被害者と捉え、社会的不正義を「暴露」する批評が主流の中、近代が暴力的なまでに排除した「感情」を修復する文体を提示することで、完全なる自律性を要請する社会システムに抵抗し得ると論じている。また、戦間期における人間間の暴力と、感情を支配・抑圧しようとする公的暴力とを結び付けたウルフの鋭い視点を前景化する。さらに、Högberg 曰く、自己の主人たれという政治的理想への疑念は、間主観性（intersubjectivity）と倫理の問題を提起すると言う。Högberg はバトラーの「責任＝応答可能性」（accountability）とクリステヴァの「詩的言語」（poetic language）を援用し、象徴界を問いに付すと同時に、「私」と「あなた」の境界が揺ら

ぐ前主体性への一時的な回帰を試みる。それにより、絶対的「I」、ひいては「I」を生み出す社会規範を宙吊りにし、既存の権力に対する異議申し立てを非暴力な仕方で行うのである。

第 3 章は、リュス・イリガライの「愛と情動の倫理」（ethics of love and affection）に着目し、ウルフの自伝的小説『灯台へ』を取り上げる。イリガライは、エマニュエル・レヴィナスの「絶対的に他なるもの」（absolute alterity）と他者と「一体になる」（inextricably one）欲望とを結び付け、親密さを間主観性の境界が溶解するような原初の様態への回帰と定義した。イリガライ・ウルフ両者に共通する親密な表現に「触覚」を提示した Jessica Berman を受け、Högberg はウルフとロジャー・フライが継続的に芸術について議論を交わしていた事実を提示し、ウルフがポスト印象派の美学、つまり「視覚」表現も文体に取り入れようとしたと論じる。そして、ウルフの「他者と一体化する欲望」（the desire for intimacy）を視覚に接続し、コミュニケーションや間主観性を妨げる要素として視覚を排除したイリガライの哲学を問い直す。以上の分析を通して、イリガライの哲学とウルフの『灯台へ』の交差性を示しつつ、リリーがラムジー夫人の肖像画を描くこと、つまり他者を表象することの困難さの中に倫理的問いを見出してゆく。

第 4 章は、バトラーの「可傷性」（vulnerability）とクリステヴァの原記号界から、ウルフの最高傑作と名高い『波』（1931）を論じる。全知の語りの廃止や登場人物の徹底した内面描写によってリアリズム文学との断絶を図った本作は、モダニズム文学の極北とも評され、非政治的作品の代表格として読まれてきた。1991 年、Jane Marcus による革新的な論考“Britannia Rules The Waves”を契機に『波』の政治性を分析する研究が続くものの、「独白」（soliloquy）技法が政治的要素として提出されることはほとんどなかった。このような背景のもと、Högberg はウルフが「独白」のアフォーダンスをラディカルに拡大したと論じた Caroline Levine を引き継ぎ、「独白」を議論の中心に据えることで『波』に新たな視座を与えることに成功している。また、『波』の政治性を可視化するために、論調が大きく異なる『三ギニー』（1938）と並べた点も本書の新しさである。Högberg は『三ギニー』の草稿を丁寧に読み込み、『自分ひとりの部屋』に登場する専制的モチーフ「I」が、『波』においても家父長制・ナショナリズム・ファシズムと共に問題化されていると指摘する。「I」や国家のように、人工的に分断された境界の脆さにこそ非暴力な関係性を夢見る礎があるとし、『三ギニー』が追求した関係性の倫理的発露こそが『波』であると、Högberg は結論付ける。続けて Högberg はバトラーの可傷性の概念を引用し、他者への根源的な曝されと依存を伴う主体の脆さを説明する。自らの可傷性を認識することを反戦の立場に接続し、6 人の登場人物が「独白」によって混ざり合う様子を描いた『波』の倫理的側面を浮き彫りにする。さらに、このような自己の境界を宙吊りにする詩的文体にクリステヴァを重ね、書くという行為を通じて自らの主体性が絶えず問いに付される作者の存在に照射することで、作品から作者ウルフにまで分析の射程を広げている。このように、Högberg はリアリズム文学からの分離を象徴する「内的独白」（interior monologue）を、台頭するファシズムやナシ

ョナリズムに対する非暴力な応答として論じることで、暴力や体制順応主義に抵抗し得る芸術の可能性を描出している。

ウルフ研究の伝統的な二項対立を揺さぶりつつ、本書が一貫して追求したのは、暴力に陥らない仕方でいかに暴力に抵抗するかであった。迫り来る戦争の気配の中、他者と共に生きることを描き続けた作家としてウルフを眼差す Högberg の研究は、戦争が決して遠くはない時代を生きる私たちに、暴力を拒み、祈りにも似た仕方で他者と生きる道を照らしてくれるだろう。過去の文学を通じて現在を考える契機となる、有益な一冊である。

参考文献

Minow-Pinkney, Makiko. “Psychoanalytic Approaches.” *Palgrave Advances in Virginia Woolf Studies.* Edited by Anna Snaith, Springer, 2007, pp. 60-82.